

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の 一体的な充実に関する研究

—自らの学習を調整する活動に重点を置いた授業実践を通して—

【研究の概要】

令和3年1月の中央教育審議会答申において、新しい時代の学校教育の姿として、「全ての
子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」が提言された。この答
申の中で、子供一人一人が自立した学習者として学び続けていくことが求められている。

本研究では、自立した学習者の育成に向け、「いわての授業づくり3つの視点」を生徒が自
ら学習を調整することに関する観点で捉え直し、授業実践事例集を作成した。

キーワード：自己調整

《研究協力校》

花巻市立花巻中学校

岩手県立花巻南高等学校

令和7年3月

岩手県立総合教育センター

教科領域教育担当	福田 勝雄	（総論）
	西澤 孝司	（中学校国語科）
	福井 正人	（中学校社会科）
	向口 千絵子	（中学校外国語科）
	高橋 渉	（高等学校数学科数学Ⅱ）
	高橋 正幸	（高等学校地理歴史科日本史探究）
理科教育担当	熊谷 篤	（高等学校理科生物基礎）

目 次

I	研究主題	1
II	主題設定理由	1
III	研究の目的	1
IV	研究の方法	1
V	研究構想	2
1	研究の基本的な考え方	2
(1)	個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実について	2
(2)	自ら学習を調整すること（自己調整）について	4
(3)	「いわての授業づくり3つの視点」について	4
2	本研究の手立て	6
3	研究構想図	7
VI	実践事例	8
1	自ら学習を調整する活動に重点を置いた「いわての授業づくり3つの視点」による 実践事例	8
(1)	視点1「学習の見通し」	8
(2)	視点2「学習課題を解決するための学習活動」	13
(3)	視点3「学習の振り返り」	19
2	「いわての授業づくり3つの視点」による生徒が自ら学習を調整する活動のイメージ	24
VII	研究のまとめ	26
1	成果	27
2	課題	27
VIII	引用文献、参考文献、引用 Web ページ、参考 Web ページ	29

I 研究主題

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に関する研究
—自らの学習を調整する活動に重点を置いた授業実践を通して—

II 主題設定理由

令和3年1月の中央教育審議会答申（以下、「答申」）では、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」が提言された。さらに、同年3月に「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」（以下、「参考資料」）が通知された。未来の社会を見据え、児童生徒の資質・能力を育成するに当たっては、学習指導要領の趣旨を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」という観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、これまで培われてきた工夫とともに、ICTの新たな可能性を指導に生かすことで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていくことが重要であると示されている。この取組は、学習指導要領前文に記載されている「一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう」に育成していくことにつながると述べられている。

この「答申」において、2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として、これからの学校教育においては、子供がICTも活用しながら自ら学習を調整しながら学び、子供一人一人が自立した学習者として学び続けていくことが求められている。

本県では、平成27年度から、生徒の「確かな学び、豊かな学び」の実現に向けて「いわての授業づくり3つの視点」を掲げ、全県で共通して取り組んできた。この視点には、自己調整の要素が含まれている。一人一台端末の環境が整い、一人一人の教育的ニーズ・理解度に応じた個別学習や情報を収集・編集し、即時に共有・共同編集でき、多様な意見に触れることが可能になった今、生徒が自ら学習を調整する活動を効果的に指導できる機会と捉える。

そこで、本研究では、「いわての授業づくり3つの視点」を生徒が自ら学習を調整することに関する観点から捉え直し、授業実践事例集を作成する。その事例集において、生徒が自ら学習を調整する姿やその活動を促す学習指導について具体化することで、教員の授業改善に資することを目指す。

III 研究の目的

自立した学習者の育成を目指し、生徒が自ら学習を調整する活動に重点を置いた授業実践事例集を作成することを目的とする。

IV 研究の方法

1 以下の指導の手立てを取り入れた授業実践を行う。

生徒が自ら学習を調整する活動に重点を置いた「いわての授業づくり3つの視点」による授業実践

2 授業実践を通して、以下の点について事例集にまとめる。

- (1) 「いわての授業づくり3つの視点」における生徒が自ら学習を調整する姿
- (2) 生徒が自ら学習を調整する活動を促す学習指導

3 授業実践は、以下の中学校及び高等学校の協力を得て、実施する。

研究協力校	実践教科
花巻市立花巻中学校	国語、社会、外国語
花巻南高等学校	数学科数学Ⅱ、地理歴史科日本史探究、理科生物基礎

V 研究構想

1 研究の基本的な考え方

(1) 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実について

「答申」では、新しい時代の学校教育の姿として、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」が提言された。この「答申」の中で「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要であると示されている（図1）。

3. 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

① 個別最適な学び

（「個に応じた指導」（指導の個別化と学習の個性化）を学習者の視点から整理した概念）

- ◆ 学習指導要領では、「個に応じた指導」を一層重視し、指導方法や指導体制の工夫改善により、「個に応じた指導」の充実を図るとともに、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整えることが示されており、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ることが必要
- ◆ GIGAスクール構想の実現による新たなICT環境の活用、少人数によるきめ細かな指導体制の整備を進め、「個に応じた指導」を充実していくことが重要
- ◆ その際、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、学びの動機付けや幅広い資質・能力の育成に向けた効果的な取組を展開し、個々の家庭の経済事情等に左右されることなく、子供たちに必要な力を育む

指導の個別化

- 基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するため、支援が必要な子供により重点的な指導を行うことなど効果的な指導を実現
- 特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行う

学習の個性化

- 基礎的・基本的な知識・技能等や情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、子供の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する

◆ 「個別最適な学び」が進められるよう、これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる

◆ その際、ICTの活用により、学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ、健康診断情報等を利活用することや、教師の負担を軽減することが重要

② 協働的な学び

◆ 「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要

◆ 集団の中で個が埋没してしまうことのないよう、一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせられ、よりよい学びを生み出す

● 知・徳・体を一体的に育むためには、教師と子供、子供同士の関わり合い、自分の感覚や行為を通して理解する実習・実験、地域社会での体験活動など、様々な場面でリアルな体験を通して学ぶことの重要性が、AI技術が高度に発達するSociety5.0時代にこそ一層高まる

● 同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや、ICTの活用による空間的・時間的制約を超えた他の学校の子供等との学び合いも大切

それぞれの学びを一体的に充実し
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる

図1 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）【概要】文部科学省（令和3年4月22日更新）

図1の「答申」の概要には、「個別最適な学び」は、学習指導要領が示す以下の視点を適切に活用した学習活動の充実を図ることなどが示されている。

- ・「個に応じた指導」を一層重視し、指導方法や指導体制の工夫改善により、「個に応じた指導」の充実を図ること
- ・コンピュータや情報通信機器ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整えること

この「個別最適な学び」には、「指導の個別化」と「学習の個性化」の二つの側面がある。また、「協働的な学び」については、「探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多

様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要であることと、一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出すこと」と示されている。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」をまとめると、表1のとおりである。表1から「個別最適な学び」の目指す姿の共通点は、自ら学習を調整することであると捉えることができる。また、「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、相補し合う関係でもある。

表1 指導の個別化と学習の個性化「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)【概要】文部科学省(令和3年4月22日更新)から筆者がまとめたもの

個別最適な学び	指導の個別化	目指す生徒の姿	・基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得し、思考力・判断力・表現力等や自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組むこと
		指導の手立て	・支援が必要な子供により重点的な指導を行うことなど効果的な指導を行うこと ・特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行うこと
	学習の個性化	目指す生徒の姿	・子供自身が、学習が最適となるよう調整すること
		指導の手立て	・基礎的・基本的な知識・技能や情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、子供の興味関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供すること
協働的な学び		目指す生徒の姿	・子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となること
		指導の手立て	・「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう探究的な学習や体験活動等を通じ、必要な資質・能力を育成すること ・集団の中で個が埋没してしまうことがないよう、一人一人のよさや可能性を生かすこと

(2) 自ら学習を調整すること（自己調整）について

「答申」において、「2020 年代を通じて実現すべき『令和の日本型学校教育』の姿として、子供一人一人が自立した学習者として学び続けていくことが改めて焦点化され、これからの学校教育においては、子供が I C T も活用しながら自ら学習を調整しながら学んでいくことができるよう『個に応じた指導』を充実することが必要である」と示されている。この自ら学習を調整していくという言葉に関して、国立教育政策研究所「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」の「主体的に学習に取り組む態度」の評価（注 1）と平成 28 年答申の「評価に当たっての留意点」（注 2）、令和 3 年度「参考資料」（注 3）には次のような記述がある。この言葉を手がかりに生徒が自ら学習を調整する姿とその活動を促す学習指導を具体化していきたいと考える。

- 自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら学ぶこと
- 自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげること
- 学習の目標や教材について理解し、計画を立て、見通しをもって学習し、その過程や達成状況を評価して次につなげること

(3) 「いわての授業づくり 3 つの視点」について

本県では、平成 27 年度から、児童生徒の「確かな学び、豊かな学び」の実現に向けて「いわての授業づくり 3 つの視点」を掲げ、全県で共通して取り組み、学校での組織的な対応を展開することで、児童生徒一人一人の学力を保障し、豊かな人間の育成を図っている（図 2）。

この視点は、「学習の見通し」「学習課題を解決するための学習活動」「学習の振り返り」のそれぞれの段階における授業改善の視点を示している。この三つの段階は、自ら学習を調整するための手立てと重なりとともに、文言にも自己調整の要素が記されている。

「いわての授業づくり3つの視点」

視点1「学習の見通し」

■児童生徒の姿■

- 1 自らの気づきや考え、学習経験などを基に、友だちや先生との対話を通して、主体的に学習課題を見出し出している。
- 2 課題解決に向けて、既習事項(用いるもの)や、考え方(用い方)を確認し、解決方法や結果を予想している。

【授業づくりのポイント】

- ア 単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、育成を目指す資質・能力を児童生徒の姿で具体化する。(目標と評価規準の明確化)
- イ 児童生徒の気づきや考え、興味・関心から問いを引き出しながら、必然性のある学習課題を設定する。
- ウ 児童生徒が、課題解決の方法や過程についての見通しをもったり、振り返ることができるように構造的な板書(キーワードを示す等)を計画する。(視点1～3に共通)

視点2「学習課題を解決するための学習活動」

■児童生徒の姿■

- 3 わからないところは自分で調べたり、友だちや先生に質問したりして、見通しをもって主体的に課題解決に取り組んでいる。
- 4 自分の考えを、友だちの考えと比べながら見直し、よりよい考えに修正しながら、理由や根拠がわかるように表現している。

【授業づくりのポイント】

- エ 児童生徒が各教科等における「見方・考え方」を働かせながら、主体的に課題解決に取り組めるような学習活動を充実させる。
- オ つまづきを想定して学習活動、支援方法を計画し、児童生徒が粘り強く取り組めるようにする。
- カ 目的に応じて、ペア等のグループ活動を位置付け、児童生徒が対話的な学びを通して、自分の考え等を評価したり・改善(自己調整)したりすることができるようにする。

視点3「学習の振り返り」

■児童生徒の姿■

- 5 単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、できるようになったことやできなかったことなど、課題解決の過程や成果を自分の言葉で表現している。
- 6 評価問題等を通じて身に付けたことを振り返り、課題解決の達成感や学習内容の有用感を感じながら、次時の学習や今後の生活に結びつけている。
- 7 自身の学ぶ態度(粘り強さ、自己調整力等)に変容を自覚している。

【授業づくりのポイント】

- キ 単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、学習内容や学習方法、課題解決の過程等、学んだことを自覚できるよう促す。
- ク 評価問題や、児童生徒の自己評価・相互評価等により、児童生徒が達成感や学習内容の有用感を得られるようにする。

図2 「いわての授業づくり3つの視点」 令和6年度岩手県学校教育指導指針（幼稚園・小学校・中学校・義務教育学校）p.14

「いわての授業づくり3つの視点」 令和6年度岩手県学校教育指導指針（高等学校教育）p.20

2 本研究の手立て

本研究の方法は、「いわて授業づくり3つの視点」の文言を新たに作り変えるのではなく、従来の視点を生徒が自ら学習を調整する観点から捉え直すこととする。そのため、授業実践では「いわての授業づくり3つの視点」の中から、本報告書 p. 4 (2) に挙げた生徒が自ら学習を調整することに関わるキーワードを取り上げる。そして授業実践を通して、生徒が自らの学習を調整する姿や、その活動を促す学習指導を記録し、授業実践事例集としてまとめる。「いわての授業づくり3つの視点」を基にすることで、県内の学校がこれまでの取組を土台に、日々の実践を見直しながら容易に一步を踏み出せると考える。

表2の「いわての授業づくり3つの視点」のキーワードを特に意識し、授業づくりに取り組むこととする。

表2 「いわての授業づくり3つの視点」の中の生徒が自ら学習を調整することに関するキーワード

いわての授業づくり3つの視点

(1) 視点1「学習の見通し」

■生徒の姿■

- ・気づきや考え、学習経験などを基に
- ・既習事項や考え方を確認

(2) 視点2「学習課題を解決するための学習活動」

■生徒の姿■

- ・自分で調べたり、友だちや先生に質問したり
- ・よりよい考えに修正しながら

(3) 視点3「学習の振り返り」

■生徒の姿■

- ・課題解決の過程や成果を自分の言葉で
- ・次時の学習や今後の生活に結びつけている
- ・変容を自覚

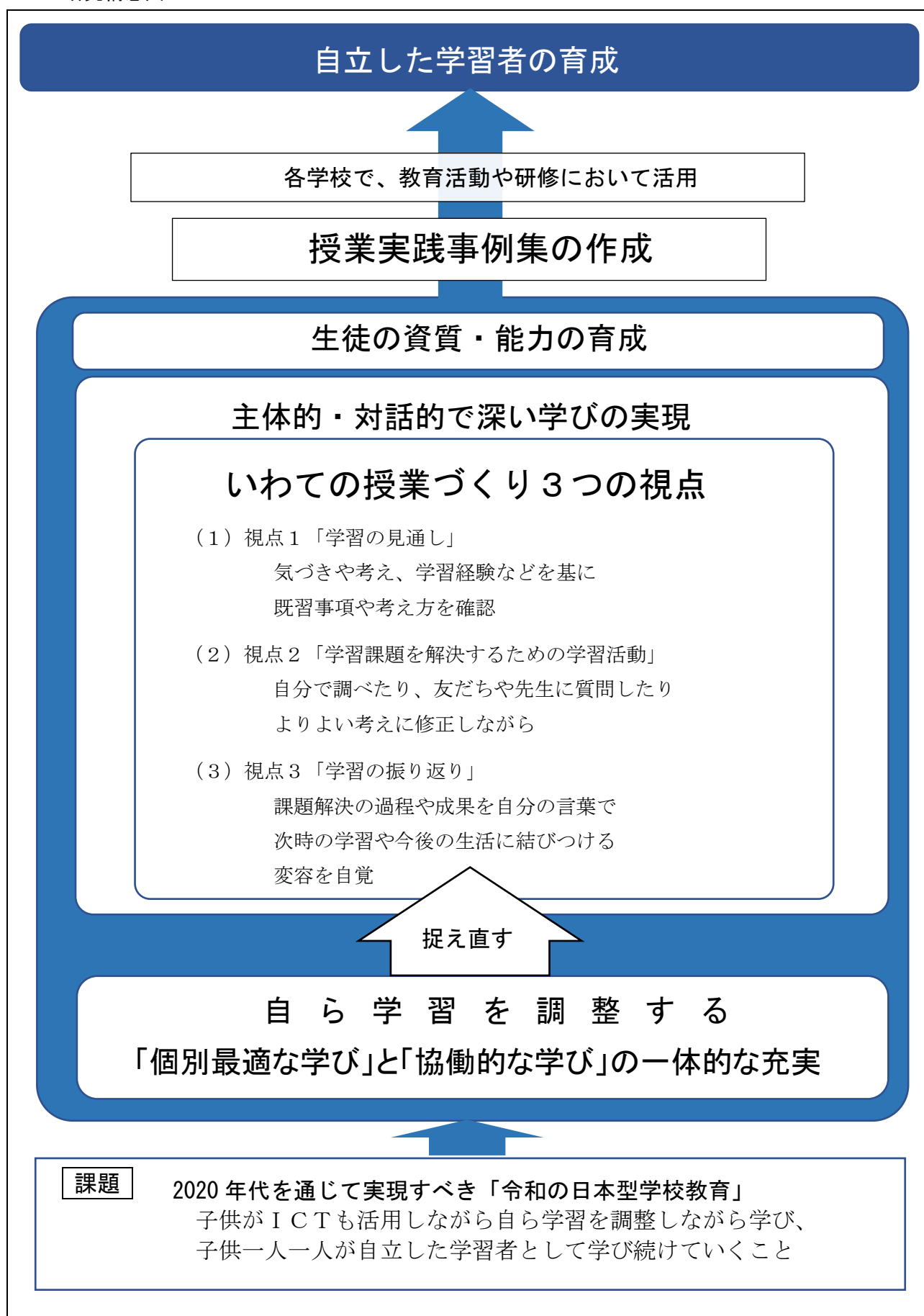


図3 研究構想図

VI 实践事例

六つの授業実践の記録を「いわての授業づくり3つの視点」を基に、単元における自ら学習を調整している生徒の姿と、その活動を促す学習指導について記載した（各実践の単元の目標や単元計画などの詳細については、実践事例集を参照）。

本報告書では、その記録の一部と「いわての授業づくり3つの視点」における自ら学習を調整している生徒の姿、及びその活動を促す学習指導を抜き出し、表にまとめた。

1 自ら学習を調整する活動に重点を置いた「いわての授業づくり3つの視点」による実践事例

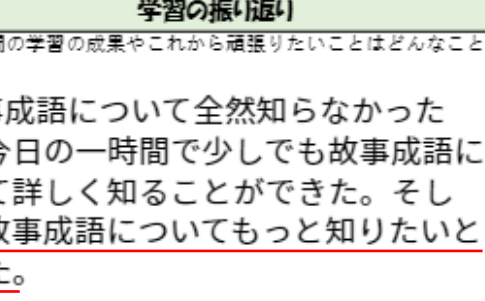
(1) 視点1 「学習の見通し」

ア 視点1における二つの教科の実践（実践事例集から）

中学校 国語科 時を超える言葉「故事成語」～言葉の成り立ちを知る良さに迫る～

視点1「学習の見通し」●生徒の実態に即した単元の学習課題の設定と学習の見通しの共有

第1時 単元の学習課題を設定し学習の見通しをもつ場面



学習の振り返り

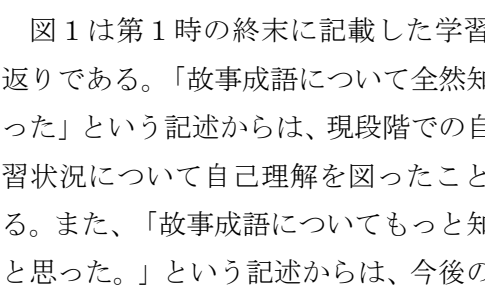
この時間の学習の成果やこれから頑張りたいことはどんなことですか。

故事成語について全然知らなかったが、今日の一時間で少しでも故事成語について詳しく知ることができた。そして、故事成語についてもっと知りたいと思った。

図1 第1時の学習の振り返りの記述

図1は第1時の終末に記載した学習の振り返りである。「故事成語について全然知らなかった」という記述からは、現段階での自己の学習状況について自己理解を図ったことが伺える。また、「故事成語についてもっと知りたいと思った。」という記述からは、今後の単元の

学習に対しての興味や意欲が喚起されたことが読み取れる。また、図2は、単元の学習課題に対して現段階の自分なりの考えがまとめられており、「もっと詳しく知りたいので、他の故事成語の成り立ちを勉強しながら考えてい



学習の振り返り

この時間の学習の成果やこれから頑張りたいことはどんなことですか。

学習前の段階での「言葉の成り立ちを知ることの良さ」についてまとめることができました。もっと詳しく知りたいので、他の故事成語の成り立ちを勉強しながら考えていきたいと思います。

図2 第1時の学習の振り返りの記述

きたい」という記述からは、単元の学習課題の解決に向けて学習の見通しをもてた生徒の姿を見ることができる。その他「言葉の成り立ちを知ることの良さを考えて自分なりに答えを出すことができた。次は他のことをもっと深く考えてみたいと思った。」「これから成り立ちについて理解できるようにしたい。」「もっと他の故事成語を学んでみたい。」といった記述が見られた。＜中略＞

単元学習シート（図3）の活用により、単元の学習の流れを俯瞰してことができ、見通しをもったり、学びを振り返ったりすることができる。更には、単元学習シートも含め単元で使用する資料やワークシートをロイロノートの1枚のカードに集約（図4）し、単元のゴールに向かってどのように学習が進んでいくのか具体的なイメージをもてるようにした。教師だけが課題解決の見通しをもつのではなく、生徒も見通しをもつことができた事により、主体的

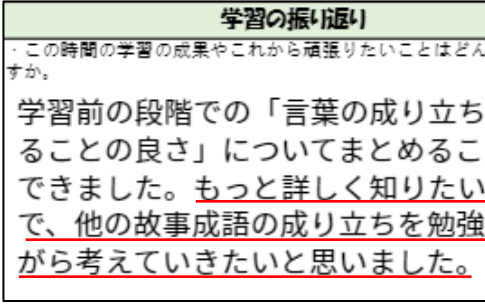


図3 単元学習シート

な学習の展開につながったと考える。上記のように生徒一人一人に学習の必然性や学習の見通しをもたせることをねらいとし単元の導入の工夫を図った。更に生徒が自分の学びとして単元の学習を進めていくためには、学習計画の立案や課題解決の方法についても生徒とともに検討しながら適切に学びを委ねていくことができるような単元の導入の工夫を図っていくことが求められる。



図4 学習で使用する資料等を集約したシート

高等学校 地理歴史科・日本史探究

第3節 国際関係の推移と近代産業の発展 国内産業・交通と人々の生活・文化

視点1「学習の見通し」●学習の進め方シートによる学習過程の把握と評価内容の把握

第1・2時「学習の進め方シート」により、学習の進め方とゴールについて見通しをもち、学習を進めている場面

日本史探究 学習の進め方シート（第3節 国際関係の推移と近代産業の発展）

◎単元の見取り図（太字の部分は評価ポイントになります。）

第1時

- これまでの学習を活用し、日本が近代国家として認められた時期をかんがえてみよう
それぞれで考えたことを持ち寄り、グループとしての結論を出そう
- なぜ、そう考えたかを Whiteboard の付箋にまとめてみよう
これまで学習内容の復習をしたい場合は、教科書、資料集、ノートの他、ファイル欄にあるファイルや投稿欄にある URL にアクセスし、情報を集めながら根拠をまとめよう。
(思考・判断・表現)
- 小単元全体に関わる問いに対する最初の予想を立てる (主体的に学習に取り組む態度)
これまでの中学校や歴史総合までの知識などを活用し立ててみよう

図1 「学習の進め方シート」内容



図3 グループの役割分担場面

授業を休んだ生徒もこのシートがあることにより、グループの活動にスムーズに参加することができていた。

配付された「学習の進め方シート」（図1）の説明を聞き、グループで、シートの内容を確認しながら、学習活動を進めていた（図2）。グループの中で、誰が何を調べ、誰が入力するのかを話し合いながら取り組む姿が見られた（図3）。



図2 協働して取り組む場面

「学習の進め方シート」は、生徒が主体的に学習を進められるよう、フローチャートで上から下に向かって本時のゴールに行き着くように示した。また、授業の中での生徒のゴールの姿を太字で示すことにより意識しやすいようにした。その結果、どの生徒も学習活動が滞ることなく、グループのメンバーと時折、活動を確認し合いながら進めていた。

イ 視点1における「自ら学習を調整する姿」と「その活動を促す学習指導」

六つの実践事例から、視点1における自ら学習を調整している生徒の姿、及びその活動を促す学習指導に関わる記述を表3にまとめた。

表3 視点1における各実践の「自ら学習を調整する姿」と「その活動を促す学習指導」について

自ら学習を調整する姿	
中・国語	単元の学習課題に対して現段階の自分なりの考えがまとめられたことや、「もっと詳しく知りたいので、他の故事成語の成り立ちを勉強しながら考えていきたい」という記述から、単元の学習課題の解決に向けて学習の見通しをもてた生徒の姿を見ることができる。
中・社会	第1時に記述した予想では、「よりよい決定をするためにどんな視点が必要か」という問いに対して、「他の人のことも考えた視点」と記述していた。予想に加わった視点の記述に注目すると、立場の下に矢印が書き加えられ「権利」と記述されている。まとめの記述の前半には、「相手の立場は、立場ではなく相手のことについていっていることを学び」と記述されていることから、学習の途中で、「他の人のことも考えた視点」が、「相手の権利を考える視点」へと概念化されたことが読み取れる。
中・外国語	- スピーチをペアで伝え合う際、教科書の表現、辞書、PCでのインターネット検索機能等、自身の選択した情報検索の方法で、素早く発信までの方向性を自己決定し表現しようとする姿が見られた。 - 実際の言語活動を通して現在自分が話すことのできる表現を確認するとともに、他の生徒が既習の表現をどのように思い出しながら話す準備をしているかを共有し、今後自分がどのような方法で言語活動を改善していくかの見通しをもった。 - 多くの生徒は聞いたことに対して感想を述べたり、質問したりすることに難しさを感じていたが、相手とのやり取りがあることを確認し、相手意識をもってスピーチを改善していくこと、どのような方法で改善していくかを考えていた。
高・数学Ⅱ	- 生徒自身が、学習シートにどのような方法で学習するのかを記述し、様々な方法を組み合わせて計画を立てた。 「周りの雰囲気にならず、他の生徒とは異なる学習方法で取り組みたい」という主体的に取り組もうとする記述が見られた。クラス全体においても、各生徒が自分の学習状況を把握し、次の授業における学習方法について考え、学習の調整を行う姿が見られた。
高・日本史探究	- 配付された「学習の進め方シート」の説明を受けたのち、グループで、シートの内容を確認しながら、学習活動を進めていた。 - グループの中で、誰が何を調べ、誰が入力するのかを話し合いながら取り組む姿が見られた。 - グループのメンバーと時折、活動を確認し合いながら進めていた。
高・生物基礎	- 構造的な学習シートによって、生徒が既習事項や第1時に学んだ内容を基に、単元を貫く問いを立てた。 - 既習事項について「思いつかない」と回答した生徒が、自ら立てた単元を貫く問いによって単元の見通しをもつことができ、「もっと知りたいと思った」と回答する記述が見られた。さらに、第1時に得られた知識から、白血球を実際に観察したことがないと気づき、実験計画の立案を行った。

自ら学習を調整する活動を促す学習指導	
中・国語	・学習履歴の確認や実態把握、単元の学習のゴールの確認をした。 ・先人の知識や教訓、機知に触れ学習をしてきている。そこで、実際に使用した教科書を提示しながら学習履歴の確認を行った。 ・単元学習シートの活用により、単元の学習の流れを俯瞰してみることができ、見通しをもったり、学びを振り返ったりすることができるようにした。 ・単元学習シートも含め単元で使用する資料やワークシートをロイロノートの1枚のカードに集約し、単元のゴールに向かってどのように学習が進んでいくのか具体的なイメージをもてるようにした。
中・社会	・常に手元に一枚ポートフォリオを置いて、既習の視点を確認したり、友達との対話による気づきを記録したりすることができるようにした。また、電子データをタブレットの中に格納し、学習の全体像を可視化した。
中・外国語	・単元全体の学習過程について、単元学習シートを基に見通しをもった後、現段階で自分がどのくらい話することができるのか自覚化を図るために、ゴールの活動と同様に職場体験についてのスピーチをペアで伝え合う活動を行った。 ・生徒がゴールで行う活動を実際に体験した後、発表会でのイメージをより明確にするために、教師が相手のスピーチを聞いた後にコメントをしたり、質問をしたりして「やり取り」を行う様子を具体的に示した。代表の生徒に教師のデモンストレーションを一台端末で撮影してもらい、学級全員がロイロノート上でいつでも繰り返し見られるようにすることで、生徒が自己調整を図りながら自身の言語活動を改善していくことができるよう工夫した。
高・数学Ⅱ	・知識や技能を獲得するために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど、自ら学習を調整することができるように、学習計画を生徒自身で考える時間を設定した。この計画には、学習内容だけではなく学習方法も記述するようにした。 ・スムーズに学習計画を立てることができるようにするため、学習シートには各時間に教師が指導する内容と、生徒自身がどのような方法で学習するのかを記載した。
高・日本史探究	・「学習の進め方シート」は、生徒が主体的に学習を進められるよう、フローチャートで上から下に向かって本時のゴールに行き着くように示した。 ・授業の中での生徒のゴールの姿を太字で示すことにより意識しやすいようにした。
高・生物基礎	・学習シートは、左上段に既習事項の確認があり、左下には第1時の学習課題を解決するために、生徒が自ら調べる内容を配置している。また、左側の既習事項と右側の振り返りを並べて比較できるようにした。これによって、生徒が授業前後の知識や考えの変容を捉え、単元を貫く問いを見いだすことができるようにした。 ・生徒が経験した新型コロナウイルスや様々なパンデミックを生徒自身が調べる展開にした。これは、生徒が既習事項である「白血球は病原菌を排除する」という考え方が矛盾していることに気付くようにしたためである。

ウ 視点1における自ら学習を調整する姿とその活動を促す学習指導に関する見解

授業実践において、生徒が自身の学習状況を確認し、目標と現状のギャップを埋めるための計画を立てる姿が見られた。生徒は不足や課題を明確にし、自律的に改善策を考え、学びの質を高めていくことができた。このことは、生徒が主体的に取り組む姿勢を育む点で重要である。

国語では、生徒が現時点での自分の知識や考えを整理し、更に学びたい内容や改善点を明確にする活動を設定した。また、単元学習シートを活用し、生徒が学びの流れを視覚的に俯瞰できるようにすることで、授業者主導から生徒主体の学びへの転換を図った。この構造化されたシートは、学習効率を高めるだけでなく、次に進むべきステップを明確にし、生徒に見通しをもたせた。

社会では、生徒はより深い理解とともに課題解決に向けて意欲を高めるために、学習過程で得られた新たな視点を「予想に加わった視点」として可視化し、生徒が自己の成長を実感できるよう工夫した。

外国語では、言語活動を通じて生徒が自己の表現スキルや不足点を認識し、ペアワークやデモンストレーションを活用して他者の学びを参考にしながら自ら学習を調整する環境を整えた。単に教師の説明を聞くだけでなく、実際に言語活動を体験することで、生徒は目標達成に向けた見通しをもつことができ、学習効率の向上とスキル改善の両方を実現した。

さらに、数学Ⅱや日本史探究では、フローチャートや計画書を用いて学習内容を可視化し、生徒自身が進行状況を把握しやすくするよう工夫した。この可視化により、学習内容と方法を柔軟に調整することが可能となり、目標達成への効果的なアプローチが可能になる。生物基礎においても、学習シートを通じて既習事項と新たな学びを比較する活動を組み込み、生徒は過去の学びを振り返りながら今後の学習の方向性を見通すことができるようした。

これらの授業実践は、単元の学びを構造化し、段階的に進める仕組みを取り入れた。単元全体の方向性を明確にし、目標と学習プロセスを連動させることで、生徒の学びはより順序立てて進められるようになり、学習内容の質が高まると考える。さらに、既習事項を振り返りながら新たな学びを加えるプロセスが強調されることで、知識やスキルの定着が促されると考える。

以上のように、生徒が主体的に取り組む姿勢を育むこれらの実践は、個別最適な学びを実現するための基盤となる。自ら学習を調整する活動を通じて、生徒が明確な目標を持ち、それに向けて計画的に学びを進めることが、学びの質を更に高めるために必要であるといえる。

(2) 視点2「学習課題を解決するための学習活動」

ア 視点2における二つの教科の実践（実践事例集から）

中学校 社会科 公民 第1章 現代社会と私たち 第3節 現代社会の見方や考え方

視点2「学習課題を解決するための学習活動」●パフォーマンス課題の設定による学習の複線化

第4時 獲得した視点を生かして課題を追究する場面

第3時までに獲得した、「効率」の視点、「手続きの公正さ」の視点、「結果や機会の公正さ」の視点が実際の決定場面に生かされているかどうか確かめ、適切な資料を選択してまとめるパフォーマンス課題を設定した。図2のように、グループ内で三つの視点を分担して調べ、追究内容の複線化を図ることで、一人一人の学習に責任を与え、より自ら学習を調整する必要感が生まれるようにした。図3のように、6種類の資料を教師が準備し、自分の視点を説明するための資料の解釈という一番重要な判断に意識が向かう環境構成とした。学習内容を複線化したり、同じ視点で調べたりする方法は初めてだったので、同じ視点で調べる生徒

資 料		
①さまざまな市民の意見を取り入れるために開いたワークショップ	②建設候補地の検討について	③花巻図書館新設予定地の状況
④新図書館の基本方針（3）暮らしや仕事地域の課題解決に役立つ場の提供施設としての図書館	⑤令和5年度に受け取った2つの要望等について	⑥新図書館整備のこれまでの歩み

図3 提示した資料

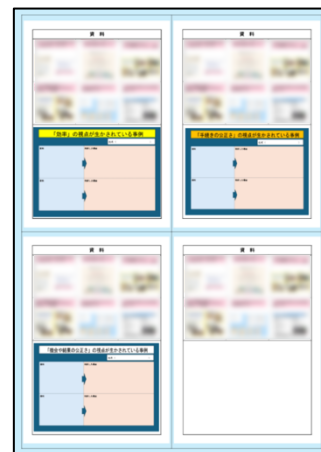


図2 パフォーマンス課題

同士のグループを意図的に構成し、その上で調べ方や協働の度合いは自分達で調整してよいことを伝えた。生徒は、図4のように、第3時までのノートを振り返りながら、視点を確かめつつ、課題に取り組んでいた。個人内で獲得した知識の使い方を調整しながら、学びを深めている例



図4 既習を生かして学ぶ生徒

と捉える。図5は、生徒同士での対話により、資料の解釈を確かめている様子である。資料選択の段階で、自分の視点を説明するための資料として、その選択の仕方が妥当であるか検討することにより、その後の活動に安心して取り組むことができたと分析する。図6は、教師を交えた話し合いにより、考えの修正を図っている場面である。

資料選択に迷う生徒A（左から2番目）に対し、教師が、「周りのメンバーの意見を聞いてみようよ。」と働きかけ、周りの生徒同士で自分の解釈の仕方を説明し合う関わりが生まれた。その後、説明を納得して受け入れたAは、選び直した資料を使って、学習を進めることができた。

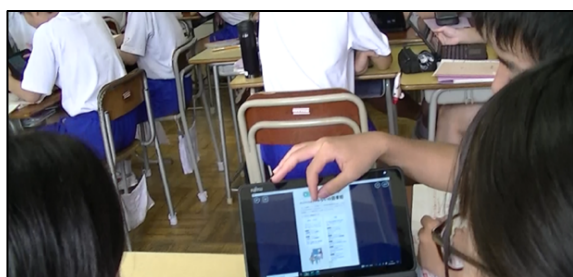


図5 資料の解釈の仕方を話し合う生徒



図6 教師を交えて話し合う生徒

第1～3時 各時間の学習計画達成に向けて進める場面

第1時に学習計画を立て、それぞれの授業の最後には学習の進め方について振り返り、次時の進め方に改善が必要な場合は、それを記述するようにした。そのことにより、生徒は、それぞれの計画に沿って進めることができていた。学習方法については、まずは自分で考えることを伝えていたことにより、クラウドに保存している解答（図4）を見る生徒が多かった。また、個人で解決できなかった問題については、近くの生徒同士で話し合う様子が見られた（図5）。

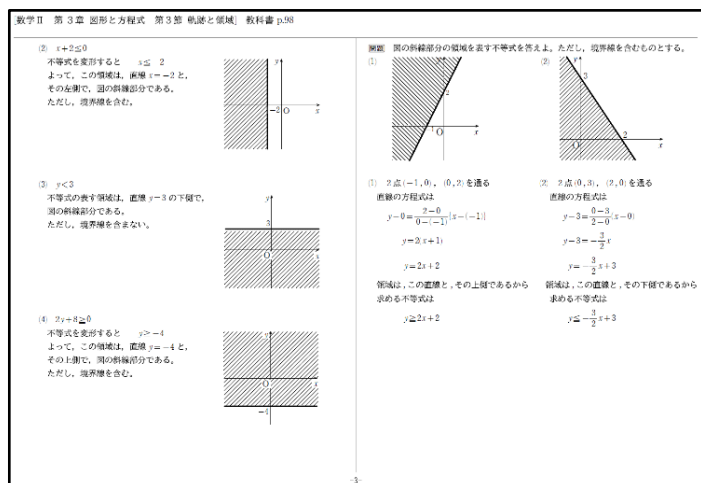


図4 クラウドにある解答

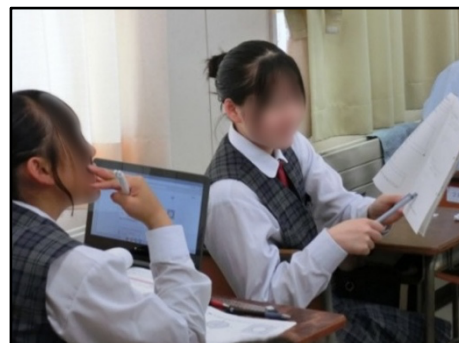


図5 解答を説明し伝え合う様子

数学Ⅱ 第3章 図形と方程式 第3節 軌跡と領域 (p.96～103)										
練習32	練習33	問題	練習34	練習35	問題	練習36	練習37	問題	練習38	練習39
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	-	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐

イ 視点2における「自ら学習を調整する姿」と「その活動を促す学習指導」

六つの実践事例から視点2における自ら学習を調整している生徒の姿、及びその活動を促す学習指導に関わる記述を表4にまとめた。

表4 視点2における各実践の「自ら学習を調整する姿」と「その活動を促す学習指導」について

自ら学習を調整する姿	
中・国語	・読み方が難しい語句「祭祀」に対して読み仮名を付けたり、会話文を挿入したりすることで分かりやすく、具体的に説明できるよう修正を図った。 ・振り返りの記述からは、前時の学習を生かし本時の学習を進められた生徒の姿、他者との対話を通し、相手意識をもちながら修正をした生徒の姿を読み取ることができる。更には、本時の学習での自己の成長について触れながら次時に向けての見通しをもった振り返りをした生徒の姿も見られた。 ・クラウドを活用し、個々の目的に沿って対話する相手を選択し、何を調べたのか、どのように調べたのか聞き合うこと。
中・社会	・資料選択の段階で、自分の視点を説明するための資料として、その選択の仕方が妥当であるか検討することにより、その後の活動に安心して取り組むことができた。 ・資料選択に迷う生徒Aに対し、教師が、「周りのメンバーの意見を聞いてみようよ。」と働きかけ、周りの生徒同士で自分の解釈の仕方を説明し合う関わりが生まれた。その後、説明を納得して受け入れたAは、選び直した資料を使って、学習を進め直すことができた。
中・外国語	・生徒は、自身の必要とする音声情報に集中し、繰り返し聞いたり、速度を調節したりしながら学習者用デジタル教科書の自分なりの使用の仕方を探っていた。短い時間での操作であっても、個別での使用を継続することで、生徒は互いに有用な方法を教え合うなど、目的に応じた使用ができていた。 ・教科書の職場体験に関する英文を音読する個人練習と併せて、ペアで音読の録音課題に協働で取り組む活動を通じて、発音の難しい表現を互いに確認したり、学習者用デジタル教科書の機能で分からないことを教え合ったりと、互いの学習の様子を知って自身の学習の改善に生かそうとする姿が見られた。
高・数学Ⅱ	・学習計画を立て、それぞれの授業の最後には学習の進め方について振り返り、次時の進め方に改善が必要な場合は、それを記述するようにした。そのことにより、生徒は、それぞれの計画に沿って進めることができていた。学習方法については、まずは自分で考えることを伝えていたことにより、クラウドに保存している解答を見る生徒が多かった。また、個人で解決できなかった問題については、近くの生徒同士で話し合う様子が見られた。 ・シートを確認することで、新たな問題を考える際に、自分と同じ部分を変更した生徒同士が、考え方について話し合う姿が見られた。

高・日本史探究	・生徒は、教科書やインターネット、URLを提示した動画などから自分に合った調査方法を選択し、学習を進めていた。活動が停滞したグループは、クラウド上で他のグループのまとめ方を参考にして、日本とイギリスの共通点と相違点をまとめていた。 ・学習課題に基づいて、グループワークで役割分担した上で、それぞれに学習を進め、クラウド上のホワイトボードやワークシートにまとめる活動を行った。それぞれに作業状況を閲覧し合い、新たな考えを加え、個人で単元シートにまとめた。 ・生徒は自身の状況に合わせて教科書も含めた複数の学習方法から選択し、学習を進めることができた。
高・生物基礎	・3人グループを作り実験計画を比較・検討したことで、材料を具体的に考えたり、必要な器具を追加したりするなど計画を改善した。また、次時に実験計画の再検討を行った。その結果、実施が難しかった計画が修正された。例えば、入手困難な人間の血液から、手に入りやすい動物の血液への変更、プレパレート作成に必要なスポイトや実験手順の追加が行われた。また観察時の注意点も検討された。

自ら学習を調整する活動を促す学習指導	
中・国語	・途中段階で提出箱に提出させ、他者のまとめ方、説明の仕方等を参考にしたり質問したりする時間を設け、修正やブラッシュアップを促した。更に授業後半では自分とは異なる故事成語を選択した生徒に自分の説明が伝わるか確認をさせた。 ・同じ故事成語を選択した者同士で座席を組むとともに、クラウド上で誰がどの故事成語を選択したのかが分かるようにした。 ・何を調べたのか、どのように調べたのかも聞き合うことで、自力解決の手立てを獲得させた。 ・本単元では、生徒が自力解決できるよう、漢和辞典や関連本の設置、「漫画故事成語」や必要な情報にアクセスできる「Webカード」を準備した。
中・社会	・「効率」の視点、「手続きの公正さ」の視点、「結果や機会の公正さ」の視点が実際の決定場面に生かされているかどうか確かめ、適切な資料を基に資料を選択してまとめるパフォーマンス課題を設定した。 ・グループ内で三つの視点を分担して調べ、追究内容の複線化を図ることで、一人一人の学習に責任を与え、より自ら学習を調整する必要感が生まれるようにした。 ・同じ視点で調べる生徒同士のグループを意図的に構成し、その上で調べ方や協働の度合は自分達で調整してよいことを伝えた。 ・視点が違うのに、同じ資料を根拠にしていた場合は、その妥当性を話し合うように指示した。また、資料や説明を修正した場合は、資料に書き加え、学びの経過を残すよう指示した。 ・環境構成で大切にしたことの一つは「明らかな正解をつくらない。」ということである。そのために提示する資料の数や種類を調整しながら、予想される解釈の仕方を吟味した。

中・外国語	・単元のゴールの活動イメージをもった際に、生徒の自発的な活用が少なかった学習者用デジタル教科書について、生徒が自分のペースで操作する時間を設けた。 ・言語活動の途中で、メモを基にどのようなスピーチを行ったか、全体共有する際には、単元の目標である「職場体験について、お互いの苦労や努力を共感し合う」ことに対して、言語面、内容面での振り返りを促した。 ・コミュニケーションの目的や場面、状況等を踏まえて、教科書等の英文を取り入れる工夫をしている生徒の例を全体で共有することで、相手意識をもって自己の言語活動を改善するために、他の生徒のスピーチをよく聞こうとしたり、学習者用デジタル教科書の音声を確認したりする姿につながるよう工夫した。
高・数学Ⅱ	・第1時に学習計画を立て、それぞれの授業の最後には学習の進め方について振り返り、次時の進め方に改善が必要な場合は、それを記述するようにした。 ・練習問題の進捗状況を入力するシートをクラウドで共有した。教科書の練習問題を解いたら、このシートに随時入力するように伝えた。授業者は、このシートを見ることで、解答が遅くなっている生徒には疑問点についての確認をしたり、先に進んでいる生徒には現在どのような問題を考えているかなどを聞いたりすることができた。 ・単元の学習課題の解答を確認した後は、学びを深めるために、問題の条件を自由に変更して再度取り組むように働きかけた。変更した条件を生徒同士で確認できるようにするため、クラウドには変更した条件を入力するシートを準備した。
高・日本史探究	・グループワーク学習では、生徒それぞれのレディネスが重要になるため、事前に既習内容の定着状況を調査した。その傾向を踏まえて、教科書の内容をまとめたスライド（音声入り）、5分程度に視聴できる動画（NHK for School）のURLをクラウド上に準備した。 ・学習課題のまとめは個人で行い、タブレット端末、スマートフォンで撮影し、投稿することにより、授業者がその内容を評価、助言することで生徒は学習後も内容について学び直すことができるようにした。
高・生物基礎	・材料、器具、方法を視点に実験計画を発想することができるようにした。また、それぞれの項目について注意点を話し合うことにした。また、始めに考えた実験計画において、実現可能なものや実現が困難なものは、理由とともに提示した。 ・白血球の観察において、立案した実験計画が妥当であったか、得られた結果と教員の提示した白血球の食作用の動画の比較を行った。 ・実験を生徒に委ねるにあたって、実験計画の改善点を示すとともに、観察ができなかった場合に備えて、食作用が確認できる動画を用意した。また、観察できなかった班は、食作用の動画を見ることで、その原因を考え、「実験の仕方を考えてより学べるようなやり方を学びたい」と考えるきっかけをつくった。

ウ 視点2における自ら学習を調整する姿とその活動を促す学習指導に関する見解

生徒が自ら学習を調整するには、個人の目標に沿った方法で進めるだけでなく、他者と協働しながら進め方を柔軟に見直し、試行錯誤を通じて学びを深めることも必要となる。特に、他者の意見や異なる視点と関わり合うことで、自分自身の学習の進め方や理解度に新たな気づきを得る機会が増え、最終的には学習内容の定着と実践的な応用がしやすくなる。このような学びを支えるために、計画→実施→振り返り→修正という学びのサイクルが設計されている点が重要である。

国語では、難解な語句の読み方や説明の仕方を修正し、相手に伝わりやすくする工夫を行なうことで、生徒は単なる知識の習得だけでなく、相手に伝えたり、他者の視点に立ったりするなど相手意識をもつようにした。また、クラウドを活用して自分の調査内容を他者と共有しながら学びを進めることで、生徒は自分の考えに自信をもちやすくなったり、不明確だった部分を明確にしたりすることができた。他者の視点を活用して新たな視点や改善点に気付く機会を生み出し、協働的な学びを通じた学習の調整を促した。

社会においても、資料選択の段階で他者の意見を聞きながら自らの解釈を見直す活動を設定した。生徒は、自分とは異なる解釈に触れることで、自分の視点の妥当性を確認できるだけでなく、幅広い視点から判断することができた。このような協働による学びは、適度な難易度や多様な資料を活用した環境構成の成果でもある。例えば、資料の内容が単一の視点に偏らず、複数の解釈を許容するよう工夫したことで、生徒が主体的に試行錯誤しながら学びを進める動機付けとなった。

外国語では、デジタル教科書を用いた音声の確認やペアでの音読練習を通じて、他者の表現の仕方を確認し合う場を設定した。生徒は他者の学び方を参考にすることで、自身の課題を見付けたり、自分に合った学習方法を取り入れたりすることが可能になった。特に、他者との対話を通して進める言語活動は、互いに助け合いながら個別の課題解決を図ることができ、自ら学習を調整することを促す方法として有効である。

数学Ⅱでも、授業ごとに学習計画を振り返り、改善点を考える時間を設け、必要に応じてクラウド内にあるシートを見て、他者との相談も推奨したことにより、生徒が計画を単に立てるだけでなく、具体的な課題に応じた計画を修正することを促した。また、クラウド上での共同作業を通じて、視覚的に進捗を確認しながら情報を共有する環境を整備した。

さらに日本史探究や生物基礎では、調査方法や実験計画をグループで考案し、他のグループの進め方を参考にしたり、失敗を踏まえて再挑戦したりする活動を設けた。例えば、生物基礎の実験では、異なる視点をもつ仲間との比較や検討を通じて、自らの計画を具体的に改善する姿が見られ、学習課題の達成に向けた柔軟な対応が求められた。実験を実施しながらその結果について話し合うことで、学びを深める試行錯誤を促した。

このように、生徒一人一人が他者との協働や試行錯誤を通じて具体的な課題解決の道筋を見通し、目標達成に向かう方法を身に付けることは、生徒が生涯学び続けるための基盤となる。他者の視点や考えを取り入れつつ、自分自身の学びを主体的に調整していくことが、持続的な学びの循環を支える要素となる。

(3) 視点3「学習の振り返り」

ア 視点3における二つの教科の実践（実践事例集から）

中学校 外国語 PROGRAM 5 Work Experience (SUNSHINE ENGLISH COURSE 2)

視点3「学習の振り返り」 ●学んだことの自覚化を促す場の設定

第7時 単元のゴールでの言語活動で、他のクラスの生徒と混じったグループで言語活動を行う場面

表3 生徒の記述した単元末の振り返り

	(1) この単元での学習を通して、できるようになってきたことは何ですか。また、なぜできるようになってきたと思いますか。	(2) これからの学習で、さらにできるようになりたいことは何ですか。
生徒1	相手の目を見て話せた。いつもはよくカンペを作ってそればかり見ていたけど、今回は単語のチャートだけだったので、しっかり考えて言いたいことをしっかり話せた。おかげでけっこういいねにしゃべれた。	自分で内容を考えてしっかり話せたので、かなりハードルが高いけど、その場で考えて答える今回の質問みたいなのが焦らずしっかりできるようになりたい。
生徒2	学んだことなどを文に起こして言うことができるように少しはなった気がする。簡単な文でも言うことができるようになって良かった。	もっと今よりも難しい文を作って言えるようになりたい。簡単な文でも意味がしっかり伝えられるようにしたい。
生徒3	たくさん教科書を参考にしたからメモだけで話せるようになった。	より少ないメモで話せるようにしたい。
生徒4	どんな意味なのかを自分で考えることや、知っている単語を使って頑張って伝えようとするのができた。他の人の発表・質問を聞いて、自分に活かすことができた。	英語が苦手だけど、発表してみてもっと知っている言葉を増やして使えるようになりたいと思った。大変で難しかったけど頑張ることができた。
生徒5	今まではあまり自分で文を考えて言うということが無かったけど、この学習を通して文を考えて書き、相手に伝えるということができるようになった。	これからの学習でも分からない部分はあると思うけど、あきらめずにこの学習が生かせるようにしたい。

本単元では、対話的な学びにおける思考・判断・表現の質をより高めるために、単元のゴールでの活動の相手を、普段は別々に外国語を学んでいる他のクラスの生徒とした。言語活動を通して初めて知る事実や、相手の話す考え、思いを真剣に受け止めて言語活動を継続しようとする姿からは、各単位時間の学びを進めてきたことを基に、自ら学習を調整し、段階的に自信を深めている様子がうかがえた(表3、図13)。



図13 他のクラスの生徒と言語活動を行う様子

単元終了時の振り返りの記述には、自身の変容について気付いたことや、今後の学習で、より難しい課題にも粘り強く取り組もうとする意思が表れている。

外国語科の評価についての考え方において、「主体的に学習に取り組む態度」と「思考・判断・表現」とは基本的に一体的に評価を行うものであるが、「主体的に学習に取り組む態度」は時間をかけて育まれることから、本単元の生徒の振り返り記述のみではなく、学期の他単元における「話すこと」領域の言語活動の様子を踏まえて評価を行う点に留意が必要である。

中学校学習指導要領解説(平成29年告示)外国語編 第2章外国語科の目標及び内容 第1節 外国語科の目標(2)には、「思考力、判断力、表現力等」を高めていくための学習過程が示されている。

- ①設定されたコミュニケーションの目的や場面、状況等を理解する
- ②目的に応じて情報や意見などを発信するまでの方向性を決定し、コミュニケーションの見通しを立てる
- ③目的達成のため、具体的なコミュニケーションを行う
- ④言語面・内容面で自ら学習のまとめと振り返りを行う

これらの流れの中で、学んだことの意味付けを行ったり、既得の知識や経験と、新たに得られた知識を言語活動で活用したりする学習を充実させることは、教師の一斉指導のみでは難しい。生徒が自ら学習を調整することを促しながら、どんな学習方法で自身の言語活動の改善が図られたかの自覚化を図り、得た達成感を次の学びへとつなげることで、自立的に外国語を学ぼうとする態度を育成したい。そのためにも、ICT等を活用しながら個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させることを目指す単元構想が必須である。

高等学校 理科・生物基礎 (2) 生物の体内環境の維持 ア 生物の体内環境 (ウ) 免疫

視点3「学習の振り返り」手立てカ

- 単元の終末に、学習前の自分と学習後の自分を比較することを通して、問題解決の過程を振り返り、自分の学び方のよさを自覚できるようにする。

第6時 単元を通して学んだ知識を振り返り、興味・関心をもった病気について調べる場面（手立てカ）

6時間目 【単元のまとめ】 人類の病気への対抗 Rep 提出日 年 組 番 氏名 授業日：2024 年 月 日 曜日 時間 天候 【課題】 自己免疫疾患とワクチンと血清療法についてまとめ、興味を持った病気について原因や対抗方法について考える。 自己免疫疾患について調べてみよう 花粉症 どのような点が自己免疫疾患ですか？ エイズ どのような点が自己免疫疾患ですか？ リウマチ どのような点が自己免疫疾患ですか？ ワクチンと血清療法について異なる点と共通する点を下の図にまとめてみよう ワクチン 血清療法	これまで学んだ内容を活かして病気とその対抗方法について調べてみよう 興味を持った病気について調べてみよう どのような病気か、興味を持った理由をまとめよう その病気が体内に侵入すると体内の免疫はどのように対抗しますか 作成したウェビングマップなどを使いながら、説明してみよう 体内の免疫以外には、どのような対抗方法が考えられますか これまでに学習した内容から、病気への対抗方法を考えてみましょう 今日の授業から深まった知識を書いてみよう。 今日の授業を終えて、より学びたいと思ったことを書いてみよう。 そのために、どんな学び方が必要だと思いますか？
---	--

図 20 第6時の学習シート

単元の終末に、図 20 の学習シートの左側に示した構成に従って、既習事項と比較しながら免疫の不具合が原因となる病気や免疫を利用した治療方法について調べた。その中で、免疫の過程のどこに不具合があるか、治療方法が免疫の過程のどの部分を利用したものかを理解した。その後、図 20 の右側上段に示した構成に従って、既習事項を活用し、病気に対する知識、体内での免疫の作用、薬など免疫以外の治療方法についてまとめた。図 21 に示した生徒は、病気が体内に侵入した際に免疫がどのように対抗するか、単元を通して学んだ生物の用語の意味を理解し、活用しながらまとめ

ることができた。さらに、図 22 の生徒は、「免疫が自身を攻撃する場合があることを知り、おどろいた」という自己の知識の変容に気付き、インフルエンザについて更に調べたいと記述した。

図 20 の右上段のように、単元を通して学んだ知識を全て想起することができるように、既習事項を確認しながら調べることができるようにした。それにより、図 21 上段のように単元の始めに興味・関心をもった病気を想起し、更に調べる生徒が多かった。その過程で、図 21 下段のように、第 4 時に作成したマップでまとめた免疫細胞同士の連携や図 20 の左側に既述した治療方法などを想起しながら調べることができたと考える。また、学習前の自分と学習後の自分を比較することを通して、問題解決の過程を振り返り、自分の学び方のよさを自覚できるようにするため、図 20 右下段のように学習の振り返りの場面を設定した。これにより、図 22 の「もっといろいろ調べてみたい」という生徒の記述から、免疫に対する興味・関心を高めることにつながったと考える。

今回の授業実践では、生徒が興味・関心をもった病気について単元の終末に調べる展開であった。しかし、生徒が決めた病気について単元を通して、多面的に調べるといった展開も考えられる。また、今回の授業実践では、単元の終末のみ、学び方のよさを確認する展開になっていた。しかし、単元を貫く問いを立てる場面や免疫細胞の連携についてまとめる場面やマップを作成する場面など、生徒が学び方を学ぶ機会を増やすことで、学び方のよさを自覚できるようにする展開も考えられる。

興味を持った病気について調べてみよう	風邪症候群
どのような病気か、興味を持った理由をまとめよう	くしゃみ、鼻水、のどの痛み、咳、たん 一番身近なものであり、
その病気が体内に侵入すると体内の免疫はどのように対抗しますか	
作成したウェビングマップなどを使いながら、説明してみましょう	自然免疫により、マクロファージと細胞が攻撃、 獲得免疫により、抗体を作る。 ↑ 特定の異物を狙って、その異物だけを攻撃

図 21 学んだ知識を活用する生徒の記述

今日の授業から深まった知識を書いてみよう。	免疫が自身を攻撃する場合があることを知り、おどろいた。
今日の授業を終えて、より学びたいと思ったことを書いてみよう。	インフルエンザのことについて言聞、まだ途中なのでもっといろいろ言聞してみたい。
そのために、どんな学び方が必要だと思いますか？	ドゥマヤア×アといふ身近なところで蓄えられ知識もそこにあると思うから、そういったものをどんどん活用する。

図 22 生徒が単元を通して学んだことから病気についてまとめた記述

イ 視点 3 における「自ら学習を調整する姿」と「その活動を促す学習指導」

六つの実践事例から視点 3 における自ら学習を調整している生徒の姿、及びその活動を促す学習指導に関わる記述を表 5 にまとめた。

表 5 視点 3 における各実践の「自ら学習を調整する姿」と「その活動を促す学習指導」について

自ら学習を調整する姿	
中・国語	・「成り立ちを調べるのは楽しいから、どんどん調べて知識も増えていく」という記載から、語句がもつ奥深さを実感しながら学習を進めていくことの良さまで考えを広げている。 ・「自分の調べたことをみんなで共有する」といった学習過程に係ること、「言葉の楽しさを知れた」といった本単元の学習の達成感につながる記述が見られた。また「これから話すとき」や「会話で使っていきたい」と今後の生活場面を想定し有用性を実感している。

中・社会	・自分達の予想が単元の学習を通して、どのように変化したのかを視覚化した。「単元全体の学習を通してどのように変化したのか」という視点からまとめを記述することができていた。
中・外国語	・単元のゴールでの言語活動で求められる条件に照らし、実際の言語活動と振り返りを繰り返したことで、自身が立てた単元の目標に対して、できるようになってきたことや難しいと思うことを自覚し、次の学習への目標をもっていた。 ・言語活動を通して初めて知る事実や、話す相手の考え、思いを真剣に受け止めて言語活動を継続しようとしていた。各単位時間の学びを進めてきたことを基に、自らの学習を振り返り、段階的に自信を深めていた。
高・数学Ⅱ	・GeoGebraを用いることにより、領域の図示について抵抗感が少なくなったことや、日常生活に関するテーマの学習課題を考えたことで、学習意欲の向上につながった。 ・最初は解決することができなかった問題を、最後にもう一度取り組むことにより、既習事項や考え方を確認し、解決方法の見通しをもつことができるようになった。 ・学習内容や学習方法、課題解決の過程や成果を意識した振り返りにより、達成感や学習内容の有用性を感じることができていた。
高・日本史探究	・第1時での自分の考えと第5時での学びで他グループが挙げた内容としての学校教育の中で西洋文化を普及させていったことを組み合わせて、学制の発布、義務教育の開始と無償化が就学率を上昇させ、識字率を大幅に向上させたことを理由として教育の拡充が明治時代を最も特徴付けるものと結論付けていた。 ・新たな疑問や関心として、受容だけでなく、文化の発信・波及といった視点を持ち、これからの学習に意欲をもつ様子が読み取れた。
高・生物基礎	・生徒は、病気が体内に侵入した際に免疫がどのように対抗するか、単元を通して学んだ生物の用語の意味を理解し、活用しながらまとめることができた。さらに生徒は、「免疫が自身を攻撃する場合があることを知り、おどろいた」という自己の知識の変容に気づき、インフルエンザについて更に調べたいと記述した。

生徒が自ら学習を調整する活動を促す学習指導	
中・国語	・単元の学習課題に対しての変容や深化を実感させるために、単元の学習課題に対する学習前後の考えを記載させた。 ・単元の振り返りとして「この単元で学んだことを振り返り、これからの学習や生活でどのように生かしていきたいですか。」という視点で振り返らせ記述させた。
中・社会	・概念を図化したものと、単元の最初に出された予想を箇条書きにしたものを提示し、自分達の予想が単元の学習を通して、どのように変化したのかを視覚化する活動を取り入れた。
中・外国語	・これまでの学習過程を見つめ、単元のゴールの活動に向けて自身が立てた目標に対して、できるようになってきたことや難しいと思うことを振り返る場面を設けた。 ・教師は、生徒が自ら学習を調整することを促しながら、どんな学習方法で自身の言語活動の改善が図られたかの自覚化を図り、得た達成感を次の学びへとつなげるようにした。

高・数学Ⅱ	・単元の最後には、学んだことや印象に残ったこと、事象を図形と方程式の考えを用いて考察するよさについて学習シートにまとめ、学習内容や学習方法、課題解決の過程や成果を意識した振り返りをさせた。
高・日本史探究	・単元の振り返りでは、初発の考えが学習過程でどのように変容したかを確認し、学んだことを整理する３段階のプロセスを取り入れた。また、学習過程で自分の考えの根拠となった事柄や、新たに生まれた問いを自覚できるよう促した。
高・生物基礎	・単元を通して学んだ知識を全て想起することができるように、既習事項を確認しながら調べることができるようにした。 ・学習前の自分と学習後の自分を比較することを通して、問題解決の過程を振り返り、自分の学び方のよさを自覚できるようにするため、学習の振り返りの場面を設定した。

ウ 視点３における自ら学習を調整する姿とその活動を促す学習指導に関する見解

生徒が自分の学習状況から単元の課題解決までの過程を実感することは、その学び方を生かし、次の学習につなげるために重要である。学習過程の中で得られる達成感や新たな発見は、学びの意欲を高め、更に多様な学びの発展を促す効果がある。

例えば、国語では、語句の成り立ちを調べる楽しさや、知識を共有する意義を実感することが、生徒にとって学びの達成感へとつながった。このような経験が、日常生活において言葉を活用する意識を育み、新たな学びの場面で言葉の使い方を工夫しようとする意欲を生む。また、生徒同士が調べた内容を共有し合う場を意図的に設け、他者の意見や視点を学ぶことで、達成感と次の学びへの動機付けを同時に高めることができた。

社会では、単元の最初の予想と学習後の結果を視覚化することで、学びの変容を確認できるようにした。こうした活動を通じて、生徒は自分の思考の進展に気づき、次に生かせる学びの土台を形成する。さらに、授業者が、学んだ内容が日常生活や社会でどのように役立つかを考える課題を提示することで、生徒は学びの実用性を実感し、実社会での応用につながる視点を持つことができた。

外国語では、言語活動を通じて相手の考えや文化的背景を理解することで、自身の表現スキルの向上や、新しい学びの目標が見えてくる。特に、目標とする言語活動と実際の活動後の自己評価を振り返りながら段階的に達成感を積み重ねたことで、自信をもって次の学習目標に向かう準備が整っていった。また、学んだ表現が日常的なコミュニケーションでどのように使えるかを意識できる活動を取り入れることで、学びが実生活に直結する感覚を生徒が得られるよう工夫した。

数学Ⅱにおいても、解決が難しかった問題に再挑戦し、学んだ知識を活用できる喜びが新たな挑戦意欲を刺激した。日常生活に応用可能な内容を学ぶ中で、学びが実生活に直結していることを実感し、次のテーマへの関心が自然に生まれた。また、解答を生徒同士で共有する場を設けることで、達成感を共有し合い、協働的な学びの基盤が形成された。

日本史探究では、他グループと学んだ知識を共有し、明治時代の教育制度の普及と西洋文化の導入について考察する過程で、歴史的事実の背景に関心を持ち、更なる探究意欲を引き出すことができた。学習を単なる知識の習得に留めず、文化や制度の広まりがもつ影響に目を向ける視点を養うことを促した。また、歴史の学びが現在の社会問題や生活にどうつながるかを意識させることで、学びが現代との接続をもつ形で深まったと考える。

生物基礎では、免疫の仕組みに驚き、更に自ら調べてみたいと思う気持ちが芽生え、学びを深化させる方向性を生徒自身が見付ける契機となった。このように、興味をもった分野を自主的に掘り下げることで、次の学習に向けた具体的なビジョンが描かれていく。さらに、生徒が学んだ内容を成果物として発表する場を設けることで、学習の意義を共有し合い、次の課題への主体的な取組を促進することができた。これらの実践から、各教科がそれぞれの特性を生かしながら、目標達成から次の展望という学びの循環を意図的につくることができた。

生徒は単元ごとの達成を実感し、次の学びに対する展望が見えてくる。この展望が、自らの学びを更に広げ、主体的に取り組む姿勢を促していく。学びの成果と達成感を土台とすることで、学習者が新しいテーマや課題に対しても前向きな姿勢で取り組みやすくなり、持続的な学びの循環が実現すると考える。

2 「いわての授業づくり3つの視点」を基にした生徒が自ら学習を調整する活動のイメージ

「いわての授業づくり3つの視点」において生徒が自ら学習を調整する姿として共通することは、どの視点においても「学習状況」と「課題解決」を常に確認することが重要であるということである。

視点1では、「学習状況」と「課題解決」が明確になれば、その間のギャップを埋める課題解決の方法や過程の見通しも立てやすくなる。個別最適な学びに関わっては、自分の興味や関心に合わせて目標を立てたり、自分に合った進め方を計画したりするということが、自ら学習を調整する活動を更に充実させる。

視点2では、「学習状況」と「課題解決」を確認しつつ、それらをつなぐ課題解決に向けた方法や過程などの進め方を調整するといった試行錯誤する活動を充実させる必要がある。協働的な学びを通して不明確だった自分の考えや進め方が他者の考えを知ることで明確になり、深めていくことができる。

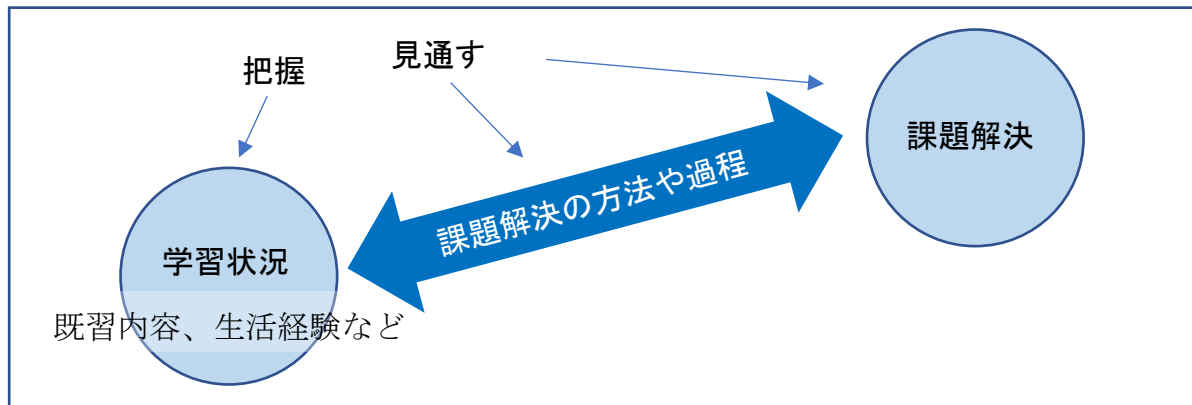
視点3における「学習状況」と「課題解決」までの課題解決に向けた方法や過程などの進め方が実感できると、その学び方を生かして、新たな学習へとつなげていこうとする意欲が生まれていくと考える。

「いわての授業づくり3つの視点」を授業づくりのポイントに重点を置き、授業者が主に教える内容や進行を決定し、学習活動が授業者の計画に沿って進められる形になると、学びの意図や過程が形式的になり、実際の生徒の学びの姿に結び付きにくくなる。このような授業では、授業者が求める成果や目標を達成することが優先され、学習の深まりや生徒一人一人の思考の変化が置き去りにされることがある。したがって、「いわての授業づくり3つの視点」を生徒の学びの姿を第一にイメージしてから取り組むことの重要性を、本研究の授業実践づくりを通して実感することができたと考える。

生徒が自ら学習を調整する活動に重点を置いた「いわての授業づくり3つの視点」のそれぞれをあえて一文と図で表すと次のようになる（図4）。

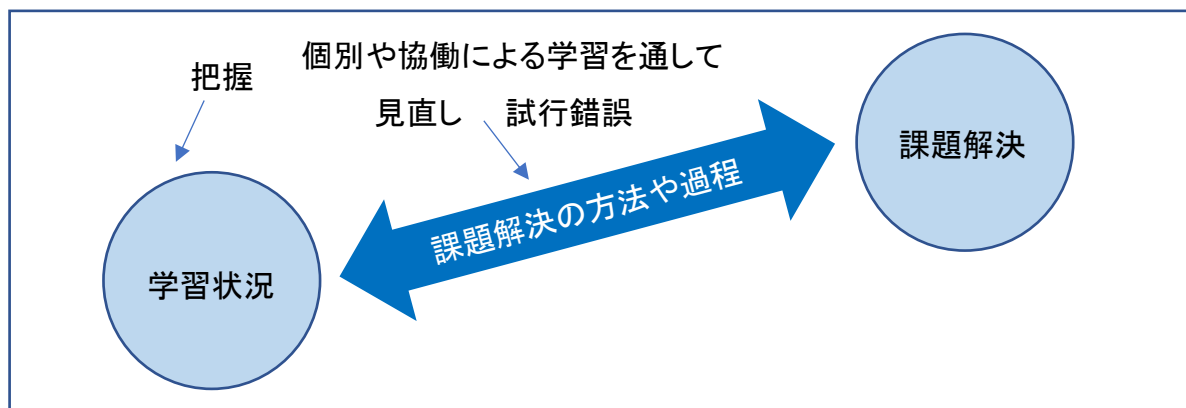
視点1「学習の見通し」

自らの学習状況を把握し、課題解決の方法や過程について見通しをもつこと



視点2「学習課題を解決するための学習活動」

自らの学習状況を把握し、進め方を見直したり、試行錯誤したりするなど自ら学習を調整しながら学ぶこと



視点3「学習の振り返り」

自らの学習状況を把握し、学習内容や学習方法、課題解決の過程等を評価して新たな学習につなげること

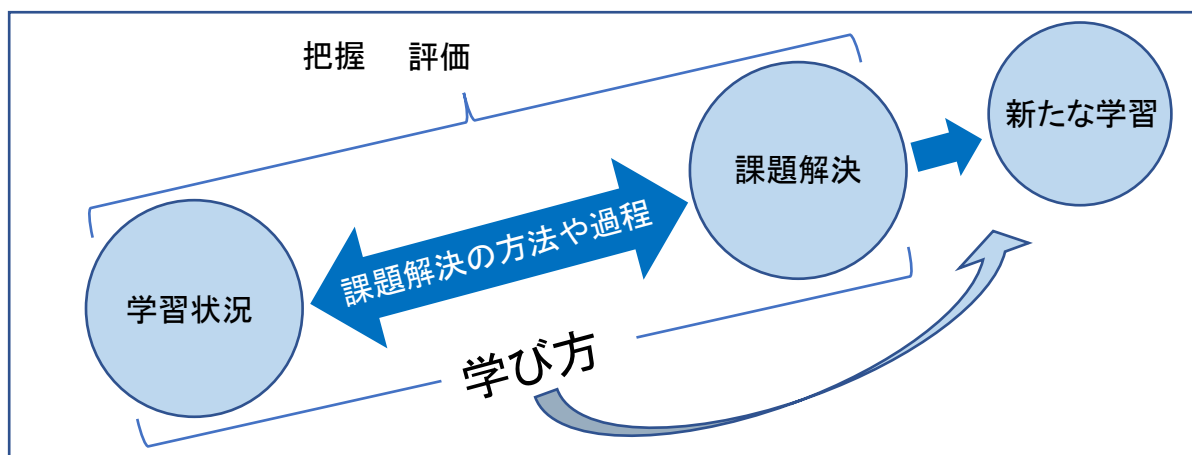


図4 自ら学びを調整する活動に重点を置いた「いわての授業づくり3つの視点」のイメージ

VII 研究のまとめ

本研究は、生徒が自ら学習を調整する観点から「いわての授業づくり3つの視点」を捉え直すことによって、生徒が自ら学習を調整する姿やその活動を促す学習指導も具体化した実践事例集を作成することを目指した。作成に当たり実践した授業は、生徒が自立した学習者として質の高い学びを続けられるよう、単元や時間のまとまりを工夫して授業を構想し実践した。

授業実践では、生徒自身が「学習状況」と「課題解決」を確認することで、「学習状況」と「課題解決」のギャップを埋める計画を立て、課題解決の方法や過程等を評価する活動を行なった。授業者は、「学習状況」と「課題解決」、「課題解決の方法や過程」を明確にすることで、生徒が授業の方向性を共有し、理解を深めながら進められるよう努めた。さらに、生徒が学習を調整しやすい環境を整え、必要なツールや学習資源を提供する支援者としての役割に注力した。この取組は、従来の教師主導の授業から、生徒が主体的に学ぶ授業への移行を推進した。

授業者は、単元や時間のまとまりを意識し、生徒が課題解決のプロセスを明確に把握できるような工夫を考えた。例えば、単元の導入で生徒が学習目標を設定し、それを達成するための方法を自分自身で決めたり、他者と話し合ったりしながら計画を立てる場を設けた。生徒が主体的に課題解決に取り組み、個別最適な学びと協働的な学びが一体的に行われている様子が見られた。特に協働的な学びでは、異なる視点に触れることを通じて生徒たちが学びを進めている姿を見ることができた。クラウドを活用した情報共有やデジタル教科書の使用など、ICTの活用も積極的に行われ、生徒同士が意見を交わし、新たな発見や学習方法の改善を行う姿が多く見られた。

「いわての授業づくり3つの視点」は、こうした授業実践を支える基盤として機能した。生徒たちは、授業の様々な場面で自ら学習を調整しており、その姿も多様である。実践事例集を作成するに当たっては、生徒が自ら学習を調整する姿や学習の調整を促す学習指導を整理する必要があるという課題があったが、「いわての授業づくり3つの視点」を活用することで、具体的に示すことができた。異なる学校種や教科の授業者たちが議論を深める際、「いわての授業づくり3つの視点」は共通の枠組みとして重要な役割を果たした。

授業づくりにおいては、生徒がどのように学ぶか、課題解決のプロセスを想定するために、生徒の実態を把握することが必要不可欠である。実践した授業者は、限られた時間の中で事前に授業参観を行い、生徒の実態を踏まえた上で、研究協力者と共に効果的な授業実践に向けた協議を重ねた。本研究で取り組んだ学習指導は、他校の生徒にそのまま適用できるわけではない。学習指導を考える際は、地域ごとの教育的背景や学校の実態を考慮し、各学校に適したアプローチを模索することが必要である。

本研究の成果は、令和6年9月18日の「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会論点整理」（注4）で指摘された学習者自身による学習調整の観点不足を補う具体例として、教育現場で広く活用できると考える。

一方、生徒が自らの学習を調整する活動の質をより高めるためには、長期的な取組が必要であり、生徒や支援する授業者自身がスキルを身に付けるには時間を要する。また、教室内で生徒一人一人が学習の調整を常に行う状況では、多様な学習状況の変化を授業者が把握するのは容易ではなかった。現状では、学習の調整前後の結果を把握することは可能だが、その過程で生徒一人一人の学習状況がどのように変化したかを具体的に把握することは難しかった。また、生徒自身がその変化を有益で意味のあるものと実感できるようにすることも課題として残る。目に見えない形で進行する変化を把握するには、授業者が個々の学習状況を的確に捉えるだけでなく、生徒自身が学習を調整することの意

義を理解し、意識して学べるようにすることが必要である。以下に研究の成果と、今後の課題を挙げてまとめとする。

1 成果

- (1) 本研究では、生徒が自ら学習を調整する姿を明らかにするため、授業実践において、生徒が自ら決めた課題に取り組む際に、自身の「学習状況」と「課題解決」を確認し、そのギャップを埋めるための計画を立てた事例や、生徒が計画を見直し、結果を評価するプロセスを通じて課題を解決した事例を示した。このように、主体的に課題解決に取り組む活動は、生徒が自立した学習者として成長することを促す一助となる。
- (2) 授業者は、生徒が自ら学習を調整する活動を促すために「学習状況」と「課題解決」、「課題解決の方法や過程」を明確にすることで、生徒が学習を調整しやすい環境を整えた。具体的には、単元全体を俯瞰できる学習シートを提示するなど、授業の方向性を共有する工夫を行った。また、必要な学習資源やツールを提供し、課題解決の方法や進め方についての支援を行った。このような学習指導により、授業は従来の教師主導から、生徒主体の学びへと移行し、生徒の主体的な学びを実現するものとなった。

2 課題

生徒が自らの学習を調整する活動の質をより高めるためには、長期的な取組と授業者の支援が必要である。その際、授業者が個々の学習状況を的確に捉えるだけでなく、生徒自身が学習を調整することの意義を理解し、意識して学べるようにすることが必要である。

【注】

1. 国立教育政策研究所「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」の「主体的に学習に取り組む態度」の評価について次のように示されている。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価に際しては、単に継続的な行動や積極的な発言を行うなど、性格や行動面の傾向を評価するということではなく、各教科等の「主体的に学習に取り組む態度」に係る観点の趣旨に照らして、知識及び技能を習得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要である。

2. 平成 28 年「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）の「評価に当たっての留意点」の中で、次のように示している。

子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしていたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる。

3. 令和 3 年「学習指導要領の趣旨の実現に向けた 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する 参考資料」の「③ 学びに向かう力、人間性等を育成する教育の充実」の中で、次のように示している。

「学びに向かう力、人間性等」の育成は幼児期から成人までかけて徐々に進んでいくものだが、初期の試行錯誤段階を経て、様々な学びの進め方や思考ツールなどを知り、経験していくことが重要です。とりわけ小学校中学年以降、学習の目標や教材について理解し、計画を立て、見通しをもって学習し、その過程や達成状況を評価して次につなげるなど、学習の進め方を自ら調整していくことができるよう、発達の段階に配慮しながら指導することが大切です。また、中学校以降において、多様な学習の進め方を実践できる環境を整えることも重要です。

4. 令和 6 年 9 月 18 日の「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会論点整理」の p.13（1）現行の「個に応じた指導」の記述と充実の在り方に次のような記述がある。

○現行の学習指導要領においても、児童生徒の発達の支援の観点から「個に応じた指導」は重要視され、個別学習やグループ別学習など、一定の指導方法の具体例の記載もあるが、令和 3 年 1 月 26 日中央教育審議会答申の趣旨等も踏まえると、学習者自身が主体的に学習を調整していく観点からの記述が不足。

○子供が興味・関心や能力・特性等に応じて自ら教材・方法・ペース等を選択できる学習環境を教師が適切にデザインすることなど、学習者が主体的に学ぶ中で自ら学習を調整しつつ資質・能力を身に付けることの重要性やその中で教師が発揮すべき指導性について、具体的に議論し、位置付けを検討すべき。

Ⅸ 引用文献、参考文献、引用 Web ページ、参考 Web ページ

【参考文献】

- ・岩手県立総合教育センター（2022）『ICTを活用した学習活動の充実に関する研究（2年次）—教員のICT活用指導力の充実に資する実践事例集の作成を通して—【2年研究】』
- ・岩手県立総合教育センター（2022）『岩手のICT活用実践事例集』
- ・木村明憲（2023）『自己調整学習 主体的な学習者を育む方法と実践』明治図書
- ・木村明憲（2024）『自己調整学習チェックリストリストを用いた授業実践30』さくら社
- ・奈須正裕（2021）『個別最適な学びの足場を組む。』東洋館出版社
- ・奈須正裕（2022）『個別最適な学びと協働的な学び』教育開発研究所
- ・奈須正裕（2023）『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して』北大路書房
- ・バリー・J. ジーママン、ディル・H. シャンク、塚野州一（訳）（2006）『自己調整学習の理論』北大路書房
- ・バリー・J. ジーママン、セバスチアン・ボナー、塚野州一（訳）（2008）『自己調整学習の指導』北大路書房
- ・横田富信（2024）『子どもの自己調整スキルを磨く個別最適な学びと協働的な学びを根底から支える』、東洋館出版社

【引用 Web ページ】

- ・文部科学省（2021）『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf
- ・文部科学省（2021）『学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料』
https://www.mext.go.jp/content/210330-mxt_kyoiku01-000013731_09.pdf

【参考 Web ページ】

- ・文部科学省（2024）『今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会論点整理』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/184/mext_01892.html

<おわりに>

この研究を進めるにあたり、ご協力くださった研究協力校の先生方、生徒の皆さんに心からお礼を申し上げます。また、研究協力者としてご協力いただきました先生方に感謝申し上げます。